

四旬節第四主日 2014.3.30

盲人のいやし

ヨハネ福音書9章1-41節

9:1 さて、イエスは通りすがりに、生まれつき目の見えない人を見かけられた。

9:2 弟子たちがイエスに尋ねた。「ラビ、この人が生まれつき目が見えないのは、だれが罪を犯したからですか。本人ですか。それとも、両親ですか。」

9:3 イエスはお答えになった。「本人が罪を犯したからでも、両親が罪を犯したからでもない。神の業がこの人に現れるためである。

9:4 わたしたちは、わたしをお遣わしになった方の業を、まだ日のあるうちに行わねばならない。だれも働くことのできない夜が来る。

9:5 わたしは、世にいる間、世の光である。」

9:6 こう言ってから、イエスは地面に唾をし、唾で土をこねてその人の目にお塗りになった。

9:7 そして、「シロアム——『遣わされた者』という意味——の池に行って洗いなさい」と言われた。そこで、彼は行って洗い、目が見えるようになって、帰って来た。

9:8 近所の人々や、彼が物乞いであったのを前に見ていた人々が、「これは、座って物乞いをしていた人ではないか」と言った。

9:9 「その人だ」と言う者もいれば、「いや違う。似ているだけだ」と言う者もいた。本人は、「わたしがそうなのです」と言った。

9:10 そこで人々が、「では、お前の目はどのようにして開いたのか」と言う
と、

9:11 彼は答えた。「イエスという方が、土をこねてわたしの目に塗り、『シロアムに行って洗いなさい』と言われました。そこで、行って洗ったら、見えるようになったのです。」

9:12 人々が「その人はどこにいるのか」と言うと、彼は「知りません」と

言った。

9:13 人々は、前に盲人であった人をファリサイ派の人々のところへ連れて行った。

9:14 イエスが土をこねてその目を開けられたのは、安息日のことであった。

9:15 そこで、ファリサイ派の人々も、どうして見えるようになったのかと尋ねた。彼は言った。「あの方が、わたしの目にこねた土を塗りました。そして、わたしが洗うと、見えるようになったのです。」

9:16 ファリサイ派の人々の中には、「その人は、安息日を守らないから、神のもとから来た者ではない」と言う者もいれば、「どうして罪のある人間が、こんなしるしを行うことができるだろうか」と言う者もいた。こうして、彼らの間で意見が分かれた。

9:17 そこで、人々は盲人であった人に再び言った。「目を開けてくれたということだが、いったい、お前はあの人をどう思うのか。」彼は「あの方は預言者です」と言った。

9:18 それでも、ユダヤ人たちはこの人について、盲人であったのに目が見えるようになったということを信じなかった。ついに、目が見えるようになった人の両親を呼び出して、

9:19 尋ねた。「この者はあなたたちの息子で、生まれつき目が見えなかったと言うのか。それが、どうして今は目が見えるのか。」

9:20 両親は答えて言った。「これがわたしどもの息子で、生まれつき目が見えなかったことは知っています。

9:21 しかし、どうして今、目が見えるようになったかは、分かりません。だれが目を開けてくれたのかも、わたしどもは分かりません。本人にお聞きください。もう大人ですから、自分のことは自分で話すでしょう。」

9:22 両親がこう言ったのは、ユダヤ人たちを恐れていたからである。ユダヤ人たちは既に、イエスをメシアであると公に言い表す者がいれば、会堂から

追放すると決めていたのである。

9:23 両親が、「もう大人ですから、本人にお聞きください」と言ったのは、そのためである。

9:24 さて、ユダヤ人たちは、盲人であった人をもう一度呼び出して言った。

「神の前で正直に答えなさい。わたしたちは、あの者が罪ある人間だと知っているのだ。」

9:25 彼は答えた。「あの方が罪人かどうか、わたしには分かりません。ただ一つ知っているのは、目の見えなかったわたしが、今は見えるということです。」

9:26 すると、彼らは言った。「あの者はお前にどんなことをしたのか。お前の目をどうやって開けたのか。」

9:27 彼は答えた。「もうお話ししたのに、聞いてくださいませんでした。なぜまた、聞こうとなさるのですか。あなたがたもあの方の弟子になりたいのですか。」

9:28 そこで、彼らはののしって言った。「お前はあの者の弟子だが、我々はモーセの弟子だ。

9:29 我々は、神がモーセに語られたことは知っているが、あの者がどこから来たのかは知らない。」

9:30 彼は答えて言った。「あの方がどこから来られたか、あなたがたがご存じないとは、実に不思議です。あの方は、わたしの目を開けてくださったのに。」

9:31 神は罪人の言うことはお聞きにならないと、わたしたちは承知しています。しかし、神をあがめ、その御心を行う人の言うことは、お聞きになります。

9:32 生まれつき目が見えなかった者の目を開けた人がいるということなど、これまで一度も聞いたことがありません。

9:33 あの方が神のもとから来られたのでなければ、何もおできにならなかったはずです。」

9:34 彼らは、「お前は全く罪の中に生まれたのに、我々に教えようというのか」と言い返し、彼を外に追い出した。

9:35 イエスは彼が外に追い出されたことをお聞きになった。そして彼に出会うと、「あなたは人の子を信じるか」と言われた。

9:36 彼は答えて言った。「主よ、その方はどんな人ですか。その方を信じたいのですが。」

9:37 イエスは言われた。「あなたは、もうその人を見ている。あなたと話しているのが、その人だ。」

9:38 彼が、「主よ、信じます」と言って、ひざまずくと、

9:39 イエスは言われた。「わたしがこの世に来たのは、裁くためである。こうして、見えない者は見えるようになり、見える者は見えないようになる。」

9:40 イエスと一緒に居合わせたファリサイ派の人々は、これらのことを聞いて、「我々も見えないということか」と言った。

9:41 イエスは言われた。「見えなかったのであれば、罪はなかったであろう。しかし、今、『見える』とあなたたちは言っている。だから、あなたたちの罪は残る。」

説教

あなたの信仰があなたを救った。行きなさい、このことは誰にもしゃべってはならない。癒しの後、奇跡の後ではたいていイエスはこのように言って話が終わります。でも今日のテキストはちょっと違います。目を癒された人はいきなり近所の人たちになにかれといわれます。

9:8 近所の人々や、彼が物乞いであったのを前に見ていた人々が、「これは、座って物乞いをしていた人ではないか」と言った。

9:9 「その人だ」と言う者もいれば、「いや違う。似ているだけだ」と言う者もいた。本人は、「わたしがそうなのです」と言った。

<証言その一 知りません>

目が見なかったのに見えるようになったらお祝いするのが普通です。ここにもし放蕩息子のお父さんがいたら大宴会のはじまりです。しかし、始まったのは「本当にお前か？あの物乞いか？」という詮索です。癒された人はいきさつを説明してイエスのことを話します。するとここからが本番というか、裁き・裁判が始まります。

9:12 人々が「その人（イエス）はどこにいるのか」と言うと、彼は「知りません」と言った。

「知りません」これが癒された人が語る最初のイエス証言です。

<証言その二 あの方は預言者です>

9:13 人々は、前に盲人であった人をファリサイ派の人々のところへ連れて行った。

「ファリサイ派の人々のところ」とはエルサレムの最高法院に連行されていったことを意味します。癒してもらっただけなのになんで連行されるのか。どうもイエスに癒してもらったことがここで問題になっているようです。彼はその重要参考人というわけです。

9:22 ユダヤ人たちは既に、イエスをメシアであると公に言い表す者がいれば、会堂から追放すると決めていたのである。

すこし後の22節に連行理由が書いてあります。しかし、この福音記事はつじつまが合わないことが指摘されています。イエスが活動していた時期（西暦30年ごろ）にこのような追放命令はありませんでした。しかしヨハネ福音書が書かれた時代（西暦90年ごろ）ではキリスト教を異端とする決定がユダヤ教内部でなされ、イエスを信仰する、つまりクリスチャンはユダヤ人コミュニティから公式に追放するという掟ができていました。

ところで福音書はイエスを証言する書物です。それは地上のイエス（生きて教えを説いていたイエス）を証しすると同時に、復活のイエスの証しでもあ

ります。四福音書の中でもとくにヨハネ福音書は地上のイエスを証言しながら復活のイエスを照らし出す（「福音の二重性」といわれています）の傾向の強い福音書です。つまり、この物語は地上のイエスの癒し物語を描くと同時に、ヨハネが生きていた時代のユダヤ教とキリスト教の対立をもあぶりだしています。たとえばですが、エフェソ（ヨハネ福音書はエフェソで著述されたといわれる）に離散したユダヤ人たちのうちの一人が、復活のイエスの奇跡的な癒しを受けてユダヤ教からキリスト教に回心する、そしてユダヤ人社会から追放されたという事件があったのかもしれない。

9:17 そこで、人々は盲人であった人に再び言った。「目を開けてくれたということだが、いったい、お前はあの人をどう思うのか。」彼は「あの方は預言者です」と言った。

最高法院でファリサイ派は安息日に癒しを行ったことを問題にして議論し紛糾します。そして癒された人から「あの方は預言者です」という第二証言を引き出します。

<証言その三 神のもとから来られた>

9:33 あの方が神のもとから来られたのでなければ、何もおできにならなかったはずです。最高法院は彼の両親を呼び出して本人を確定した後、再度呼び出しをします。そこでも彼は目を開けてもらったという事実でイエスを支持し「神からの人」と賛美します。ついに最高法院は彼をののしって「イエスの弟子」と裁き、その罪のゆえに公式追放の刑罰を実行します。

<証言その四 主よ、信じます>

9:38 彼が、「主よ、信じます」と言って、ひざまずくと…

ユダヤ人社会から追放の刑にあったと聴きつけたイエスが彼のもとに現れ、ご自分を人の子、つまりメシア＝キリストと明らかにされます。そこで彼は第四の証言、主よ、信じますと行って、ひざまずいた、つまり礼拝しました。

<盲人とは誰か>

盲人で物乞いだった人がイエスに目を開かれたことが原因で宗教裁判にかけられ罪に問われ追放された。イエスを「知らない」という証言から始まり、

「預言者」と呼び、そして「神からの人」となり最後に「主よ、信じます」といって礼拝した。癒された人（もと盲人）がイエス証言を深めていく過程はこうなります。

先週のサマリアの女性もただ者ではなかったように、今週の元盲人も同じような印象を受けます。やたらに弁の立つ彼はほんとにただの物乞いの盲人なのか？

9節の盲人のことばの中に「わたしがそうなのです」、ギリシア語原文では「エゴー・エイミ」というセリフがあります。これは聖書の中では神の自己紹介につかわれる大切な表現で神顕現表（かみけんげんひょう）とか神名表現といって神学では重要視されます。イエスも決めセリフをいうときにはよくこの表現で自己を現します。

（イエスが湖上を歩く姿を見て弟子たちが怖れると）「エゴー・エイミ（わたしだ）怖れることはない」（マルコ6:50、マタイ14:27）など

このことば（神名表現）を盲人が自分をさす言葉として使ったということは暗喩（メタファー）をとることもできます。なにを比喩しているのかはテキストからははっきりしません。もっともはっきりしないから暗喩なんですけど。この暗喩を根拠にこの人も復活のイエスのような霊的存在、あるいは天使のような存在としてイメージを膨らませることは読み込みすぎとの非難にはあたりません。

<罪とはなにか>

冒頭で弟子たちによって提示された「罪とはなにか」は9章の最後であきらかになります。

9:39 イエスは言われた。「わたしがこの世に来たのは、裁くためである。こうして、見えない者は見えるようになり、見える者は見えないようになる。」

9:40 イエスと一緒に居合わせたファリサイ派の人々は、これらのことを聞いて、「我々も見えないということか」と言った。

9:41 イエスは言われた。「見えなかったのであれば、罪はなかったであろう。しかし、

今、『見える』とあなたたちは言っている。だから、あなたたちの罪は残る。」

なんだかややこしい言い方です。整理すると「見えない」=無罪、「見える」=有罪と結論しています。もちろん見えないままでいいわけなくて、イエスがすでに来ているのにイエス来たことが見えない=わからないでは、ただ罪がないだけです。「見えない」というのは反語表現であって、イエスはこの盲人のように目が開かれて見えることを望んでいます。でもファリサイ派の人のようにイエスを見ているのに、つまり知っているのに、光を見ているのに、イエスを拒む者は「罪は残る」つまり有罪ということです。

罪とはなにか、罪とはイエスを拒むこと、これがテキストの結論です。

罪とは何か、ヨハネ9章を読んで簡潔に答えよ。という試験問題がもしあったらこの答えで80点はとれます。でも福音書は試験問題ではありません。

わたしも生まれつきの盲人でイエスに目を開いてもらった、という貴重な体験をお持ちの方もいるかもしれませんが。でも大多数の人は違うでしょう。彼がイエスをしだいに深く知っていく過程を自分の体験に重ねることができる人はいるでしょう。また、「それはわたしです」と言った癒された人の宣言を自分のことと感ずることもできるかもしれません。両親が「本人に聞いてくれ」とつき離れたことに胸を痛める方もいるでしょう。

洗礼志願者とともにキリストの導きに従うわたしたちに聖霊の照らしがありますように。